本書の刊行によせて

して『新・私たちの人間論』が刊行されることとなりました。 このたび、ノートルダム清心女子大学の初年次必修科目である「人間論」のテキストブックと 本学はカトリックの教育修道女会であるナミュール・ノートルダム修道女会を設立母体とし

て、岡山の地で長きにわたり、キリスト教ヒューマニズムの精神に基づく女子教育を行ってまい りました。 「人間論」は本学の教育の根幹をなす「キリスト教科目」における「導入」の役割を持った科

i

かりではなく、それらを自らの「生き方」に結びつけて深く考え、理解し、さらなる学びや実践 への関心を引き出すことを目的としています。 目であり、本学の歴史や理念、聖書とキリスト教について学ぶことを通じて、ただ知識を得るば

創立者 聖ジュリー・ビリアートは、一人ひとりの人間の尊厳を大切にしながら、その人格形

成に配慮した教育の必要性を訴えました。このテキストを携えた学生の皆さん一人ひとりが、自

ださることを、心から願っております。 分自身のかけがえのない存在に深く触れ、その人生に与えられた使命を見つめて、歩み出してく

また本書を通じて、学生のみならず、より多くの方々に、本学の建学の精神と教育理念へのご

関心とご理解を深めていただくことができましたら幸いです。

ノートルダム清心女子大学 学長

津田 葵

新・私たちの人間論 目次

一.「出会い」の物語

	- 1	

	第一章	第 二 部 —		第三章	
二.カトリックとプロテスタント 47一.宗教としてのキリスト教 4	キリスト教はどんな宗教か	- キリスト教を学ぶ	三.真の自由人に向かって 40 二.「人間論」と「人格論」― 清心のリベラル・アーツ教育 36一.リベラル・アーツ教育とは何か 32	リベラル・アーツ・カレッジに学ぶ	五.清心スピリットを生きる 28四.私たちの伝統 ― アカデミック・ドレスをまとう 25三.聖母のみ名のもとに ― ノートルダム清心女子大学の出発 23二.黒く塗られた校舎 ― 激動の時代をのりこえて 22

	第三章		第二章
おわりに 112	イエス・キリストのメッセージ	五. 受難と復活の物語80二. 旧約聖書における神と人間55二. 明約聖書における神と人間55一. 聖書の基本理解53	聖書の人間観パ文化とキリスト教 50 三. ヨーロッパ文化とキリスト教 50

第二章

かかわりと成熟

一・ライフサイクルの中の人間

124

第三部
人間と
して
生きる

			第一章
三. 〈考える葦〉としての人間 120	二.オイディプスの解いた謎 118	一.人間の定義をめぐって 114	人間とは何か

いのちを見つめて — 苦しみから祈りへ・三、「おとなになる」ということ 135 135

第三章

142

二. 悲嘆から希望へ ― 死の受容とグリーフケア

一.死へのまなざし

139

139

124

おわりに — 平和の道具として生きる	三.生かされるハのち ― その責任と使命
--------------------	----------------------

181 179 175 157 152

新・私たちの人間論

序 人間論で何を学ぶか

リベラル・アーツ・カレッジで学ぶ

ません。何より入学するために皆さんは多くの時間を勉強に費やし、試験をくぐり抜けて合格し たわけです。誰もが自由に入って学べるかといえばそうではなく、ここは選ばれた人々のための 大学には学則もありますし、さまざまな規律があって、勝手気儘に遊んでいられるわけではあり 大学という学びの場所は、まずもって「自由」をそのアイデンティティとしています。

果に対して責任を負ってゆくという、「自らに由る」人生の出発点に他なりません。 由ではなく、真の自由、すなわち誰からの強制でもなく、自分自身の思考と選択、そしてその結

しかし、それでもなお大学は「自由」のための場所なのです。それは言ってみれば表面的な自

本学はリベラル・アーツ・カレッジという性格を有していますが、この「リベラル・アーツ」

みたいと思います。

めながら、そこから真の「自分自身の物語」を編み直していくことができるような学びの場であ という言葉は、もともとは隷属状態から人を自由にするための技芸、という意味だったと言われ ています。本学は一人ひとりの学生が、自分自身にすでに与えられたさまざまな「物語」を見つ

りたいと願っています。

リスト教学」とは別に「人間論」という名前の授業があるのでしょうか。少しその発端を探って てその基盤となっているキリスト教の価値観について、考えてゆく授業です。しかし、なぜ「キ 「人間論」は、そのような大学の学びへの入り口として、本学の建学の精神と教育理

「人間論」を学ぶ意義

と組み替えられたのです。これが一九九四年に「キリスト教科目」の中の必修科目「人間論」と いうかたちで受け継がれ、現在に至ります。 あった「宗教学」に「キリスト教的人間論」という副題がつけられ、少人数のクラス単位授業へ 本学のカリキュラムとして「人間論」が始まったのは、一九七〇年のことでした。必修科目で 序

状況には至らなかったようですが、さまざまな仕方で、大学における学びの意味が問い直される 多くの大学でバリケードが築かれ、 や平和を求める学生たちの活動 九七〇年頃、日本の大学は大きく揺らいでいました。一九六八年から六九年にかけて、 (いわゆる学生運動) 警察や機動隊との衝突が起こりました。本学ではそこまでの が各地に広がり、 過激化した活動に よって 自由

はずなのです。 んどの学生が、宗教的にも文化的にも、キリスト教とはあまり縁のない日常生活を過ごしてきた 日本のミッション・スクールにおいて、クリスチャンの学生の割合はきわめて少数です。 ほと

機会となったと考えられます。

混淆し、受け入れられているのです。無宗教、と呼ばれる人たちも、単純に無信仰なのではな れている部分が大きいように思われます。また実際にはさまざまな宗教、 は宗教的信仰というよりも、むしろ生活習慣の一部、あるいは冠婚葬祭のしきたりとして意識さ 日本人の宗教風土は独特です。多くの人が仏教や神道を信仰していると考えられますが、それ あまり特定の宗教を意識していない、というだけなのかもしれません。 宗派の教えや考え方が

す。そして、その答えとして導き出されたのが「キリスト教的人間論」だったのです。 見いだされるべきなのか。一九六〇年代の本学では、そうしたことが日々議論されていたようで そうした社会にあって、キリスト教の考え方を必修授業で学ぶ、ということの意味

す。こうしたヒューマニズムの理想を示すのが、イエス・キリストの生涯です。またイエスの母 けて「考える」ことです。キリスト教の価値観が示すのは、他者に奉仕し、愛に生きる人間像で ん。むしろ大切なことは、キリスト教の価値観を、自分自身の「人間としての生き方」と結びつ キリスト教を学ぶことの意義は、たんにその教義や歴史を「知る」ことにあるのではありませ

「人間論」の狙いは、皆さんをキリスト教に導き入れることではなく、まずもって皆さん一人

マリアは、女性としての生き方に道標を与えてくれる存在です。

ひとりに、自分自身の「生き方」を意識し見つめる姿勢を身につけてもらうことにあります。

を深く探求していただきたいと思います。 ながら、「生き方」の具体的なかたちとしての「宗教」や「信仰」を意識し、自分らしい生き方 その上で、選択必修の「キリスト教学」では、より学問的にキリスト教の価値観や文化に触れ

人生の途上には、必ず何かしらの困難が待ち受けています。どんなに努力しても、自分の力だ

はそうした状況の中でも希望を持ち続け、新しい価値を創造し、未来を切り開いてゆく力を与え けではどうにもならないこと、受け入れなくてはならない悲嘆や苦悩があります。しかし、 られていると思います。

その力の 〈源〉を、一緒にたずねてゆきましょう。

- 私たちの大学 - 建学の精神と教育理念

で創立七〇周年を迎えました。

会をその設立母体として、一九四九年に岡山県下初の四年制女子大学として開学し、二〇一九年

ノートルダム清心女子大学はカトリックの女子修道会であるナミュール・ノートル

ダム修道女

第一章 ノートルダム清心女子大学の教育

一.建学の精神と教育理念

の人であれ」という言葉が、 トによって設立された教育修道女会です。この設立母体の教育理念に基づき、「心を清くし、愛 に基づき、教育の機会に恵まれない人々に、善き神の愛を伝えるために、 ナミュール・ノートルダム修道女会は、フランス革命期の混乱の中で、 本学の建学の精神として定められています。 聖ジュリー・ビリアー キリスト教の深い ,信仰

また、本学の教育理念は以下のように定められています。

もの・美なるものの追求におく。リベラル・アーツ・カレッジとしての性格をもち、教育・研究を通 ことの意義を共に追求することをもって大学の使命とする。(『学生便覧』を参照 して真の自由人の育成を志し、社会生活を遂行する手段を供するとともに、むしろそれ以上に生きる ノートルダム清心女子大学は、その教育理念を、キリスト教精神にもとづいて、真なるもの・善なる

は五つあります。 ①キリスト教精神、②真善美の追求、③リベラルアーツ・カレッジ、④真の自由人の育成 いささか抽象的で、 具体的にイメージすることが難しいと思われるかもしれません。 ポイント

とにします。その代わり、まずはこの理念に関しての補足的な説明として加えられている、 持っていただくことを念頭に置いています。それゆえここでは「早わかり式」の解説は避けるこ ⑤生きることの意義の追求。 このテキストは、いわばこの五つのポイントについて、何らかの具体的なイメージを皆さんに

立の趣旨にもとづき、次の三点をとくに志向しています。 大学は、ナミュール・ノートルダム修道女会の創立者聖ジュリー ・ビリアートの教育修道会設

の文章をご紹介しましょう。

(1)社会に対しても、世界に対しても開かれた大学である。

- (2)時のしるしをよみとりながらも、時代の流れにおしながされることなく、人々が真に求めるも のにまなざしを向け、人びとに奉仕する大学である。
- (3)宗教的情操を重んじる大学である。これは、各自が謙虚におのれを恃し、愛の心をもって相互 に人格の独自性を認め合い、その可能性を信頼することによって培われるものである。

ことができるように、導くことです。そのためには、知性をもって世界に目を向けると同時に、 といえるかもしれません。 れ、「社会と世界に開かれた」さまざまな試みを続けてきました。教育活動はその原点であった ゆく姿勢を養っていくことが必要になります。 自己の限界を謙虚に受け入れつつ、与えられたものの可能性を信頼し、それを実践へとつなげて りが神から与えられたそれぞれの善さと可能性に気付き、その中に自らの使命を探し求めていく 向があります。しかし近世以降のカトリックは時代の大きな変化の中で自己批判と刷新を求めら 姿です。かつてカトリックといえば、ただ伝統と権威に基づく保守的な教派とみなされてきた傾 キリスト教的な考え方からすると、 ここで述べられているのは、カトリックの精神に基づく大学の姿であり、またそこに集う人の 教育とはただ知識や技術を授けることではなく、一人ひと

このような姿勢は、学ぶ人と教え導く人が、ともに謙虚に心を開いて世界を見つめながら、そ

こそが、本学の教育の目指すところだといえるでしょう。本学はキリスト教の大学ではあります と信頼を育んでいくことのできるような感受性や雰囲気のことなのです。そして、そこに出会わ れる他者との共感を通じて、互いに仕え合う関わりを構築していくような「人間性」を育む教育 れるものです。「宗教的情操」とは、個人の信仰の有無や質のことではなく、 の風景を共有しつつ、真になすべきことを見分けてゆけるような「場」においてこそ身につけら 「場」のあり方だと考えるべきでしょう。つまりそれは謙虚に他者に向き合い、心を通わせ、愛 いわばこのような

者の思いに目を向けてみることにします。 れ、引き継がれてきた伝統と、 さて、このような考え方は、 深い関係があります。そこで次章ではこの修道会の歴史と、創立 設立母体であるナミュール・ノートルダム修道女会からもたらさ

が、その志向するものは「宗教教育」というよりまずもって「人間教育」なのです。

二. 聖ジュリー・ビリアートとノートルダム修道女会

誕生しました。パリの北方約一三〇㎞に位置する、ソンム川流域の水都アミアンは、繊維業で栄 美しいゴシックのカテドラルで知られています。このアミアンで出会った女性たちによっ 九世紀のはじめ、革命後の混乱の続くフランスで、女性の教育のために働く小さな修道会が

その中心となったのが聖ジュリー・ビリアート(St. Julie Billiart, 1751-1816)でした。ジュ 一八〇四年にノートルダム修道女会の最初の一歩が踏み出されたのです。



弾が撃ち込まれたのです。恐ろしさのあま明っはフランス北部の農村クビリーに生まれ、小売業を営む信心深い両親のもと、不自由なく健やかに育ちました。しかし次第にま業が傾き、店も盗難に遭うなどしたため、家業が傾き、店も盗難に遭うなどしたため、家業が傾き、店も盗難に遭うなどしたため、家業が傾き、店も盗難に遭うなどしたため、

ジュリーは歩くことができなくなり、三